

早期多収が見込めるりんごの「高密植栽培」

りんご高密植栽培は慣行のわい化栽培（以下、密植栽培）の3倍に当たる10a当たり300本もの樹を密植することで、早期多収が見込めます。また、幅の狭い樹が整然と並ぶため農作業機械を導入しやすい園地となり、省力化が期待されます。

研究成果の概要

1 背景・目的

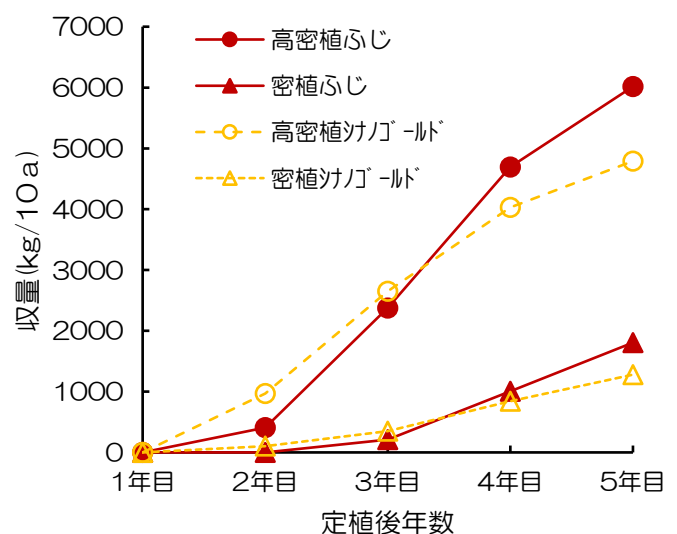
労働力不足の課題を解決するためには生産性の高い園地へ更新していく必要があります。しかし、りんごは苗木を植えてから果実が収穫できるまで3年程度、成木になり収量が最大になるまでは早くも8年程度かかります。そこで、早期多収で農作業機械を導入しやすい栽培方法である高密植栽培について、定植5年目までの収量や作業性等を明らかにしました。

2 内容

- ・ 高密植栽培では、専用の苗木を植え付けるため2年目から収穫でき、5年目には10a当たり5～6tもの収量が得られました。これは、慣行の密植栽培の3倍以上の収量です。
- ・ 高密植栽培の収量当たりの作業時間（りんご1個当たりの管理時間）は、慣行の密植栽培と比較して同等～少ない結果となりました。今後、作業機械を組み合わせることで更なる省力化が期待されます。



定植5年目の高密植栽培
(左:シナノゴールド、右:ふじ)



10a当たり収量の推移

3 活用等

- ・ 生産者が高密植栽培の導入を検討する際や、指導員が生産指導を行う際の参考にされています。

関連情報

- ・ 本研究では、高密植栽培の樹の生育や各管理作業毎の作業時間、経済性等も調査しています。
- ・ 果樹園での機械導入による省力化を目指し、機械の試験研究も同時に進めています。
- ・ 今後も高密植栽培に関する研究を継続し、成果を公表していく予定です。

